『日にちが薬』

六月二十一日は夏至です。年間で昼が一番長くなる日です。古代のインドの説話に、そんな「昼と夜の起源の物語」がありますので紹介します。

インド神話にヤマという神様がいます。ヤマは最初から神ではなく、彼は人間第一号です。そのため死者第一号でもあるのです。最初の死者として天界への道を切り開き、天界に辿り着いたヤマは、そこで天界の王となったのです。当初天界は楽園でした。ところが、のちに多くの死者がその楽園にやって来ると、中には悪人も多くいるので、ヤマは天界の楽園のほかに地下に牢獄をつくり、悪人はこの牢獄に収容しました。その地下の牢獄が「地獄」です。その地獄の管理者がヤマで、そのヤマが仏教にはいって『閻魔王』と呼ばれるようになりました。つまり、あの地獄の閻魔大王の前身が、インド神話のヤマです。

さて、ヤマにはヤミーという名の双生児の妹がいました。ヤマとヤミーは結婚して夫婦となります。そして、ヤマが死んだとき、妹であり妻であるヤミーはひどく悲しみました。神々はヤミーに、早くヤマを忘れるように諌めましたが、ヤミーはいつもこう言っていました。「今日ヤマが死んだ」というのは、そのときはまだ夜というものがなかったからです。それで、ヤミーはヤマを忘れることができなかったと思われます。神々はヤミーをかわいそうに思い、ヤミーのために夜を創ってあげたのです。夜ができたので、翌日ができました。翌日ができると、ヤマの死は昨日になり、ヤミーは、「きのう、ヤマが死んだ」と言うようになりました。そして、その昨日が一昨日になり、一週間前になり、一月前になるにつれて、ヤミーはヤマを失った悲しみを受け入れられたのです。

「日にちが薬」という言葉があります。私たちの悲しみを、「時間」が癒やしてくれることを教えてくれる言葉です。私たちが人生において苦しみの中に立たされた時、その苦しみから逃れることは難しいと思います。でも、その苦しみがいつかは「日にちが薬」で、日を追う毎に、受け入れられる時がくるかもしれません。このインドの説話に教えてもらいます。

（「仏教とっておきの話」参照）